

1. 創立40周年を祝して

40周年を迎えて



5代校長 植田 安昭

北九州工業高等専門学校が創設40周年を迎えたことは、誠にご同慶の至りであり、心からお喜び申し上げます。

平成元年から6年間北九州高専にお世話になり、高専を去ってから既に10年になります。私が校長に就任した当初は、それまで多くの高専関係者が念願であつた四年制大学の道、専科大学への名称変更問題が頓挫し、挫折感を味わっていた時期でした。しかし、高専は四年制大学に昇格する以外にこれからの道はないと、高専内外からこれまで以上に名称変更の要望、意見が強く数多く寄せられるようになり、四年制大学に与えられる学士号に結びついた専攻科を設置できることが平成4年に決まりました。毎年2～3校を目途に設置される専攻科を、北九州高専では早期に設置しようという気運が高まり、教職員一体となって取り組んだ結果、平成8年に専攻科の設置が認められました。これにより教育機能の強化を図る事ができ、高度の専門能力を持った職業人が育成できるようになりました。

このほか、思い出の一つに、長岡、豊橋の技術科学大学が創設された際、提案されていた高専卒業生

に対して大学院入学資格を付与する問題がありました。これは平成5年、大学の改革に始まった大学院制度の弾力化の一環として、実務経験を評価して卒業生に大学院入学資格が与えられことになりました。このことは卒業生の進路拡大につながると共に、高専の魅力アツプにもつながり、今後の高専発展に大きく、寄与するものと期待されます。

21世紀を迎え、中国の台頭は、地域産業の空洞化に拍車をかけて厳しいものがあります。一方、社会の情報化、多様化、国際化などによって、産業構造、社会環境等が大きく変貌してきており、地域の高専に寄せる期待と役割はこれまで以上に大きいものがあります。これらの要望に応えうる人材育成と研究機関として、北九州高専が益々充実発展し活躍されることを祈念してやみません。



平成5年8月、同窓会での挨拶



平成7年3月22日、退官に際し同窓会が謝恩の集いを開催（中央が植田校長）

北九州高専40周年おめでとうございます



6代校長 坂本 正史

40周年の記念すべき年を迎え、北九州工業高等専門学校は益々発展しておられるご様子で大変嬉しく思います。北九州高専の発展、ご活躍を心よりお祝い申し上げますと共に、更に一層の発展と地域に対する存在度を高めて頂きたいと思います。

私は神戸地震の起こった平成7年の4月から平成14年3月まで7年間北九州高専にお世話になりました。現在は西工大に勤務しておりますが、高専を離れて見て、北九州高専のすばらしさが再認識され懐かしく思い出されます。特に思い出されますのは、体育大会がすばらしいものになったこと、ロボコンとプロコンが全国大会の常連になったこと、全国高専体育大会の出場者が多すぎて、経費不足で悲鳴をあげたことなどです。優秀な若者が集まる北九州高専だからやれば出来るのだと思った次第です。

我が国の自動車を中心としたものづくりが今世界で脚光を浴びています。我が国のものづくりがこれだけ発展したのは、製造現場を大切にす我が国技術者の伝統によるのだと思います。現在の日産自動車や日立的のルーツである元日立金属戸畑工場に「戸畑鋳物」を設立したのは鮎川義介です。彼は母方の大叔父井上馨からこれからは技術の時代だといわれ、東京帝大工科大学機械科を卒業しているにもかかわらず芝浦製作所（現東芝）現場作業員として働きます。更に、鋳物技術習得のため2年間米国

へ行き、週給5ドルの見習工として親方の家に住込み、働いています。1910年戸畑鋳物を創設しますが、この時も社長でなく専務取締役兼技師長として働いています。

我が国の電気工学幕開けの功労者岩垂邦彦はNECの創設者です。小倉藩士喜多村脩蔵の次男として小倉篠崎で生れています。工部大学校電気科を卒業し、工部省に務めますが、職を辞してニューヨークへ行き、エジソンの実験室で働きます。更にエジソン・マシン・ワークス社へ移り、セールスもやり、電球売り上げナンバーワンになったといわれます。請われて大阪電灯会社の初代技師長に就任、当時東京電灯の直流方式に対して「交流方式」を採用しました。エジソンのGEは直流方式でしたのでGEは裏切り行為と非難しました。後、エジソンも自分の方が間違っていたと和解したそうです。1899年に日本電気株式会社設立、社長に就任、1929年会社を住友に譲り引退しています。

当時の帝大出身者は何もしなくても立身出世ができたでしょうが、二人とも現場が大切だとあえて困難な道に飛び込んでいます。このような先人の努力のお陰で、今の我が国の基礎が築かれたのだろーと思います。最近は現場技術を大切にしない風潮が多少あるように思いますが、工学の原点は現場にあることを忘れてはならないように思います。私の恩



東海支部結成式後、桜花爛漫の名古屋城へ（左から、坂本校長、塚本先生、松村先生）（H11・3・28）

師は久留米高専初代校長の和栗明先生ですが、実学、実務の大切さ、現場の大切さを何時も話されていました。

今勤務しております大学は工学部ですから、現場の実態から離れた技術教育では駄目だと反省しながら、高専の技術教育をお手本にしています。



同窓会で他校の校長、事務部長と談笑される坂本校長

最近の教務関連事項の変化



教務主事

物質化学工学科 磯村 計明

私は平成3年4月に本校に赴任しましたが、早いもので既に14年を経過致しました。校務関係は主として専攻科委員会と教務委員会に関わり、現在も教務の仕事を担当させて頂いています。

入学してくる新入生は、少しは揺らぎがあるもののいずれの年も非常に優れた能力を持つ諸君であったと思っています。卒業生の就職は景気の関係で

少し悪い年もありましたが、大学とは比較にならないほど多くの求人があり現在もその状態が続いています。同窓先輩諸氏の活躍のたまものと思います。赴任時は丁度本校の卒業生の大学編入が増加し始めた時期でしたが、そのような状況の中で高専に専攻科設置が可能になりました。本校も専攻科の設置に向けて当時の植田校長の指導のもとに準備委員会が作られ、平成8年4月には専攻科が設置されました。専攻科設立当時は20名の定員確保が最大の問題でしたが、最近では定員の2倍以上の専攻科入学者があり、大学編入と併せて進学が約50%を上下しています。時折私の部屋を訪ねてくれる卒業生からその同級生の諸君が元気に活躍している様子を聞くのが大きな楽しみです。しかしながら、やはり本科の5年間という心も体も大きく成長する年代特有のものか、卒業せずに学校を離れていく学生諸君がかなりいることが毎年の気がかりです。

過去10年間の間に、授業アンケートの導入、長期休暇明けの1～3学年の実力試験の導入、1、2学年への混合学級の導入と廃止があり、さらに及落判定のラインも55点から60点になり、3年前には欧米と似た単位数を考慮したに方式に移行しました。授業時間も1～5学年まで全て90分授業に移行しました。実力試験は本年度からは4学年へも実力試験を行うことになりました。平成16年4月には独立行政法人化され、平成18年4月から、高学年では大学と同じ方式の単位計算の導入が可能になるなど制度上の大きい変化も進行しています。また、本校は本年から来年にかけて、3種の異なった審査を受ける予定です。陣内校長の指導のもとで、審査のためだけではなく、多方面にわたる見直しを行うことにより本校がよりよい方向に向かうことができるよう、かつ留年・退学を減らし、力をつけた卒業生を送り出すという命題を諸先生方と模索していきたいと考えております。

40周年を迎えて



学生主事

総合科学科 坂口 浩

私が赴任したのは昭和51年ですから、ほぼ30年近くになります。その間高専も社会の変化に劣らず、非常に変化してきました。のどかであった志井の山に囲まれた田園風景は様変わりし、都会と変わらなくなりました。モノレールが通い、JR志井公園駅ができ、スーパーができ、学生の溜まり場となっていた吉田アパートもなくなりました。変わらないのは寮の裏の山だけでしょうか。

学科も現在5学科体制となり、専攻科ができ、専攻科棟ができ、総合研究実験棟、地域共同テクノセンターを中心とした外部企業などとの研究体制も整い、学内風景も様変わりしました。春に満開の花を咲かせる桜と、初夏芳しい匂いを漂わせる機械工場前の泰山木と、秋に見事な紅葉を見せるカナダ楓の並木は変わりません。

体育大会は、全学生が整然と入場行進し、学科ごとの応援合戦や競技が盛大に行われ、土曜日開催となり、保護者の応援も急増し、一大イベントになりました。棒倒しと騎馬戦は高専の伝統として今なお続いています。他方高専祭も、以前のように外部からタレントを呼んでくる企画はなくなりましたが、相変わらず北九州高専独自のアイデアあふれる企画で、体育祭と並んで二大イベントとして活況を呈しています。これらはほとんど学生会が自主的に企画、運営しています。北九州高専固有の気風を保ち

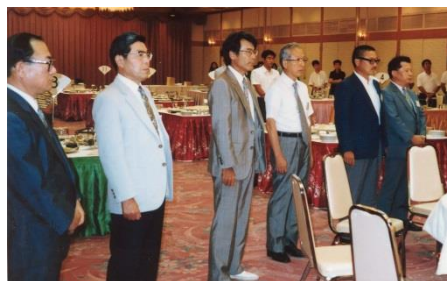
ながら風景としてはずいぶん変わったものになっています。

ロボコン大会は、村井先生のシンプルかつ機能的なアイデアの時代を踏まえ、現在は吉野・久池井先生の指導の下、ロボコン研究会を中心に学生たちが自主的に企画運営する組織に変わり、全国出場の常連校になってきました。

高専大会はバドミントンの全国6連覇を筆頭に、野球部がこの数年間で優勝3回、準優勝2回と全国の常連校に名を連ね、バスケット、剣道、柔道、卓球、軟式テニス、陸上などを含め毎年100人近い選手団を全国大会に派遣し、活躍しています。昨年から沖縄も加わり、10高専からなる九州・沖縄大会となり、ここを勝ち抜くだけでも大変です。また高専連以外に、いろいろのクラブが高体連に加入し、バドミントン、バスケット、剣道のように県大会に名を連ねるクラブも出てきました。

学生の風景も変わりました。女子学生が増え、全員で180名くらいになりました。かつてのバンカラな雰囲気はずいぶん少なくなりました。ルーズソックスはさすがに見なくなりましたがミニスカートに携帯電話など流行の普及も全国並みとなりました。現代のストレス社会を反映して、ストレスに悩む学生も増えました。それを受けてカウンセラーも置くようになりました。約半数が進学するようになり、高専の学生風景も随分変わりました。

これからの高専の風景がどのように変わっていくのかを見守ってください。



同窓会出席の佐藤、川口・坂口・石橋・日高・常行先生

学生寮の近況報告



寮務主事

総合科学科（電気工学科3期） 徳一 保生

私は自分が高専時代の大部分を学生寮で過ごした経験から、寮に対しては特別な想いがあります。しかし個人的なものは別にして、学生達には寮生活を通して、逞しさと同時に集団生活から得られる良い点をできるだけ多く学んでほしいと思っています。前寮務主事の榎村先生（機械2期）の方針を受け継いで、寮関係のスタッフ全員で「寮は寮生の手で良くして行こう」をモットーに、寮生会活動や各係りの活動を支援しています。寮生会役員もこの点をよく理解してくれて、強い責任感で立派に役目を果たしています。彼らの仕事ぶりはこちらの方が見習わなければならないほどですが、活動を通して彼ら自身が大きく成長して行く姿を見て、安心すると同時に喜びも感じさせてもらっています。

近況報告ということで、今の寮の様子をご紹介します。

○ 今年度4月スタート時の寮生数は、男子寮129名・女子寮28名、合計で157名でした。10年前の改修で、4人部屋がなくなり、1棟の1階のみ2人部屋（14室）で他は全て個室に、そして3棟の2・3階が女子寮（28部屋）に変わり、食堂→談話室だった事務室前が留学生棟（10部屋、定員12名）になりました。この改修で居住環境が格段に良くなり、それまで70～80名だった寮生数が、一挙に120～130名に増えました。この4月は、女子寮は定員い

っぱい、男子寮も2部屋しか空いていない状況でした。昨年の同時期は男女合わせて147名、一昨年は140名、その前が133名でした。近年の寮生の増加は、寮が良くなったことと合わせて、専攻科生が寮に残るようになったこと、女子寮生が増えたこと、特に今年の場合は1年生の入寮者数が例年より10名も多かったことが原因です。寮生の増加は、寮生活に活気を生み、さらには学校全体にもその雰囲気 が伝わることで、学校にはとても良い影響を及ぼします。寮生全員が元気にクラブ活動や勉強に励んでくれることを、教職員一同が心より願っています。

○ この5年間で3回、寮生から学生会長が出ました。今年度の学生会長も寮生で、5月21日の体育祭は、寮生全員が盛り上げ、通学生と大いに協力して、とても良い体育祭になりました。毎年、体育祭や高専祭が近づくにつれ、寮生も準備に追われます。今年も、下級生からは宿題をする時間と十分な睡眠を取る時間がないという声もあがっていました。これは寮生の宿命ですが、むしろ寮生の特権と捉えて、積極的に関わってほしいと思っています。限られた時間を上手く利用することもまた勉強です。逞しく成長してほしいと思います。

○ 5月28日（土）に、5年生を中心とする寮生十数名が、2棟周辺の草刈りをしてくれました。3月に寮の事務職員だった梶川さんが亡くなりましたが、その後任がまだ決まらず、草刈りまで手が回らない状態を見かねて申し出てくれました。その気持ちが本当にありがたく、嬉しく思いました。6月24日には事務職員の方が大勢で、第2体育館の周りまできれいに刈り取ってくれました。さすがに仕事が徹底していて、大変気持ちが良く、見違えるほどきれいになり、感謝の気持ちでいっぱいでした。事務の方達のパワーは大変なもので、学生達も驚くと同時に仕事の厳しさも見て勉強になったことと思います。

しかしながら、学生寮には教員でない立場の人が必ず複数人必要で、生活環境を整えたり、色取りを添えたり、相談に乗ったり、またある時は厳しく指導や助言をしたりして、寮生達を精神的にもささえていかなければなりません。できるだけ早く後任を付けてもらおう、事務サイドをお願いしています。

○ 北九州高専の寮生活を経験した者にとって、暖房が切れた後のあの冬の寒さは決して忘れられないものですが、今は夏の暑さも寮生の大きな試練になっています。地球温暖化の影響でしょうが、今の夏場の暑さは私のいた30数年前とは比べものになりません。特に、1棟3階と3棟3階の暑さは大変なものです。10年前に取り残された2棟の改修が急務ですが、何とか予算を付けていただいて、各部屋にクーラーが付けられるようにしてほしいと思っています。多くの大学がそうなったように、高専も8月10日頃までを前期の授業期間とする話があります。そうなれば、何処の高専の寮にもクーラーの設置が欠かせないものになります。毎年予算が削られている厳しい現状がありますが、何とか対策を講じなければならない状況です。

以上、近況報告ですが、毎年9月に行われる寮のリーダー研修会で、塚本氏（電気3期）、団野氏（電気7期）、松浦学生課長（都城高専卒）にご講演をしていただきました。この場を借りて、再度お礼を申し上げますとともに、今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



同窓会で談笑される徳一先生（右から2番目）

忘れえぬ人びと



同窓会教員相談役

総合科学科 日高 一字

「邯鄲の夢」とは、栄華を極めた人生も一炊の間に見た夢に過ぎなかったという故事である。開校40周年、自分の勤務年数も30年に達した。幻世は春來の夢、浮世は水上の沫ではあるけれども、忘れようにも忘れられぬ邂逅があった。以下は、その方々に対する挽歌である。

昭和49年、転任してきた自分にとって、この高専はわけの分からない伏魔殿だった。幹旋された宿舍が寮の裏にある倉庫だったのは別に驚きもなかったが、同僚に「きみは井口事務部長が連れてきた人間だから、事務方に世話になれ」と言われたのには驚いた。実際、引越して動いていただいたのは、事務方ばかりだった。今にして思えば、この発言には心底感謝している。お蔭で、事務方には何かにつけてよくしていただくことになった。

45年安保闘争世代の自分は、教官会議の不毛な（？）議論が時間の浪費に思えてしかたなかった。紫煙の中の、長時間の会議は耐え難く、若輩の立場を忘れて正論を展開、ナマを地で行き、顰蹙を買った。あるとき、三隅義生先生（一般）が自分を部屋に誘いこんでこう言った。「きみの言ってることは正しい、でも世の中、そうは出来ていないんだな。そのうちわかるよ。ははは」鷹揚にソファに身を沈めながら、先生は笑った。つかみ所のない茫洋と

した懐の深い先生だった。先生のライフワークは「人格形成における出会い」の倫理的考察。ひよこの未熟な言動を見て、老婆心を起こされたのであろう。街の「串平」で、先生に鶏だとだまして蛙を食わせたのが最後だった。やがて体調を壊し、50年5月他界された。斎場となった防府の自宅への道は遠かった。田園の農家の軒に、すでに鯉幟のない竿の先の矢車が初夏の陽に照らされて音もなく回っていた。

51年になると寮務主事補になった。物静かで、慈愛にみちた**小原人司**先生（化学）と親しくなったのもこの仕事を通してであった。小原先生は前年度より寮務主事補をする傍ら、工業高校からの編入の是非を検討する教育委員会のメンバーで、誠実に仕事をこなす不言実行のひとだった。昭和46年赴任と同時に、学位を取得したほどの俊秀、学科の星としても大いに囑望されていた。色の白い、長髪をボマードで固めた都会的な雰囲気はつねに憧れの的だった。先生は、53年10月脳出血のために急逝、42歳の若さであった。日ノ出町官舎での葬儀には多くの教え子が参列、涙で目を腫らした。自分は先生の霊安かれと、歌4首を捧げた。2首を掲げる。

教へ子の読める弔辞のとぎれたる

胸のあつきに二つ三つ咳

出棺に添ひゆく夫人^{つま}の脚ゆれて

肩に落葉の紅きがひとつ

昭和50年、当時60歳だったと思う、大柄の紳士に出会ったのも寮の宿直だった。分厚いメガネの底には技術者然とした目があつた。この紳士が**中西真佐夫**先生（電気）だった。先生は咳き込んで、早口に話す癖があつた。55年5月、通夜の席で夫人が「中西はたばこを吸わないのに肺がんになりました。排気ガスのせいとしか思えません」と言われたのが記憶にある。健康に人一倍気をつけていた先生は自転車愛好家でもあつた。

57年2月、化学の助手をしていた**首藤正範**先生が亡くなった。自分も官舎の住人、会えば挨拶をした。親しく話す機会がなかったのが残念だった。平成になると、自分は学生主事を拝命し、学科を超えて多くの先生方と交際する機会が増えた。同時に喧嘩する機会も一段と増えた。

平成3年4月、**月野光男**先生（化学）が不慮の死を遂げた。先生は何事もゆるがせに出来ない、かみそりのようなシャープで繊細な方だった。人生の先輩としていろんな話を聞かせてもらった。その頃、先生は鷹羽台にマイホームを建てていた。聞けば、ハウジングメーカーの選定、立地など家を建てる場合のノウハウを事細かに語った。メーカーの手抜き工事の批判が多かったが、自分にはそのような会社を選んだ自らの不明に対する自己叱責に思えた。自らにも厳しかった。専門に接点のない自分は、車談義に花を咲かしたこともあつた。

昭和55年より4年間寮務主事を務めた**岩淵國臣**先生（制情）は、平成になると教務主事に抜擢され、おりから高専制度の改変時期の難局を乗り切る切り札として大いに期待された。満を持しての登板だった。鬼の岩淵という評判だったが、学生を叱れば、先生も思わず涙がこぼれるぐらいの熱血漢だった。映画俳優ばりの男の美学を感じさせる先生は、男子学生の崇敬の的だった。平成5年になると、先生の体調振るわず、日高が教務主事代行をし、入試を取り仕切った。先生と学食で昼食を共にする機会があつた。先生は言った。「ようやくおやじの歳になった。親の歳を超えるのはやわいことじゃない」先生には死の予感があつたのかもしれない。5年4月に尊父と同じ歳で冥界に旅立った。先生の葬儀には満堂の卒業生や在校生が涙し、先生との別れを惜しんだ。今さらながら、偉大な人格が去つたのだと、実感した。

平成も2年になると、ロボコン高専大会がようや

く世間の注目を引くようになり、多くの学生たちがロボット製作へと情熱を傾けるようになった。そういう学生に担がれて情熱を燃やした先生がいた。それが八代高専より転勤して来ていた**吉田祐三**先生（電制）だった。先生は年齢の割には坊ちゃんで、育ちのよさを感じさせた。歯に衣着せぬ言い方で、学生や同僚と悶着を起こすことも少なくなかった。それでも何か憎めない人柄だった。本校が主催した大会のとき、先生顧問のチームは1回戦を難なくクリア、やがて惜敗した。先生は激怒し、「審判の判定に疑義がある。マスコミに電話する」といきり立った。その頃学生主事をしていて大会実行責任者でもあった自分は、慌てて先生の部屋に飛び込んだ。興奮の極みにあった先生は、受話器を取り上げたままの恰好で、説得しようとした自分を罵倒した。血の気の多いことでは先生に劣らない自分である。売り言葉に買い言葉で、一場の修羅場が出来（しゅったい）した。先生とはそれでも会えば、挨拶をするいい関係だった。6年の1月、春は名のための頃、先生は鬼籍にはいられた。

有地正敏（制情）先生は、民間から本校の助手に採用された。先生は謹厳実直な方であった。天然パーマだったことから、学生たちは「パンチの有地」などと、ニックネームを付けていた。設計製図やCAD、工学実験で先生の薫陶を受けた学生は多かった。平成8年5月、たしか26日の朝だと思うが、早めに出勤した自分に門衛が声をかけてきた。有地先生の奥様からの電話で、「主人がタバコを吸って来ませんでした。こんなことは一度もなかったことです。どうか教官室を覗いてください」ということだった。前日は体育大会、活躍の先生の姿を見ていたばかりである。自分と門衛は駆け足、部屋に着くと、鍵を開けるのもどかしくドアを引いた。自分たちが第一発見者となった。葬儀のときに「主人は血圧が高かったのです」と、夫人は漏らした。

趣味人といえば、かの**上杉直幸**（一般）先生を押してもだれも異論はなかろう。映画から音楽、絵画に到るまで、先生の関心外の事物は何にもなかった。教官室はつねに学生や先生たちの溜まり場だった。若いころは映画監督になるのが夢だったとか、本校でも学園祭に向けて多くの8ミリシネマを監督した。「噴水の止まる日」は今でも名作と語りつがれている。自分と先生の接点は、わずかにカメラだった。カメラのレンズ特性など、語れば止まるところを知らなかった。写真といえば、こんな思い出がある。昭和59年、「家には門外不出のアインシュタイン博士の写真がある」と、思いもかけない言葉が先生の口から飛び出した。喫驚した。ア博士といえば、確かに大正11年の年の暮れ1週間ほど門司（今の門司港）に滞在していた事実がある。先生の父君が写真師であったなら、不思議でない。自分は先生を拝み倒してようやく拝見する機会を得た。どうやら長谷にあった三井倶楽部（後の門鉄倶楽部）での撮影らしい。ア博士の柔和な表情が印象的だった。平成に入ると、先生は肝臓の不調を訴えた。話がそこに及ぶたび、先生は限笹のエキスを推奨し、「あなたも試してごらん」と、口癖のように言った。その頃より絵画の世界にのめりこみ、ギャラリーに出入りする先生夫妻の姿がよく見かけられるようになった。聞く機会はなかったが、上杉美術館でも開くという壮大な夢でもあったものか。10年6月、先生は、57歳を一期として逝去した。自分は、先生への弔辞でひとつの俳句を詠み、御霊への別れの言葉に添えた。アジサイの季節が来るたび、先生を思い出す。

紫陽花忌とよんでよびたし別れかな

原口俊秀（化学）先生は同期の桜である。先生は着任の頃、山手の官舎に学生を招きよく酒宴を開いた。宴たけなわになると学生に自分を迎えにこらせた。新婚ほやほやのわが新妻が料理の手伝いをする

こともたびたびだった。宴会の最後は侃侃諤諤の激論の末、散会になるのが常だった。今にして思えば、先生は自説を曲げるのを嫌った。教務主事時代にもそれは一貫していた。よく衝突した。それでも大人（たいじん）の風格があった。仕事を離れれば、誠実なひとだった。二千坪もある邸宅に招き、相撲の升席をご馳走になったのも忘れがたい。先生の部屋を訪ねると、手ずからコーヒーを入れた。「この黒砂糖は、わが家の農園の製品、福岡で採算が取れるのはむずかしい」と笑った。12年、術後の経過がよく年末には復職されたが、13年3月帰らぬひととなった。

宮浦すが（制情）先生は、実をいえば、本校にとっては旧知のひとであった。若い頃から非常勤でお世話になった。自分が転勤して来た頃、奈良女出の才媛の誉れ高い先生の姿をよく見かけたものである。本校に転属後、先生が学科長の頃だったと思う、親しく話す機会があった。親が日南とか、自分の母も飢肥ということもあって、話が盛り上がった。観音さまのような先生といえ、だれもが決まって宮浦先生を思い浮かべた。就職が芳しくなかった時代に、出来の悪い学生にも、女学生にも分け隔てなく親身に世話をやかれた。円満な先生の性格がどれほど多くの学生を人格的に陶冶したことか想像もつかない。すべてを超えて色即是空の境地にあったかに見えた先生も、やはり女性だったと確認したことがある。先生は自分が愛用していた「ダイエット・カロリーブック」を小一ヶ月借りて行かれたのである。効果がどうであったのかはついに聞きそびれた。これは心残りになった。平成14年の新春、松の内に先生は旅立った。

この学校に駆け足できて、駆け足で通り抜けた先生がいた。**吉田 章**（物化）先生であった。先生は、帽子を愛用した。廊下で会えば、「ニイ ハオ」と声をかけてきた。そのとき、ちょっと帽子に手を掛

けるのが癖だった。聞けば中国語はかなりの年季ということだった。そのころ立ち上げられたチャイ研（中国語勉強会）にも先生は熱心に参加した。先生は何事にも全力投球だった。学生の話では授業中にもキレることがあったらしい。平成16年の青葉の頃、先生は「透析のため、どうしても時間が取れないから参加できない」と言った。いかにも残念そうだった。11月、キャンパスのアメリカ楓が色づく頃、先生は不帰のひととなった。仲間であった学生課長に「ニイ チョンウエン ヨウ ジンプ マ」（中国語は進んでいますか？）という言葉を残したのが最後となった。

附記 これは12名の方々に対する自分なりの墓碑銘である。「去るものは日々に疎し」で、記憶は確実に薄れて行く。だれかがその足跡を文に残しておく必要がある。自分が適役だとは思わないが、あえて手を上げた。もう時間がないという焦燥がペンを執らせた。退職後に亡くなられた方、事務の方は割愛した。ご冥福を祈りたい。掲載の無理を聞いていただいた入江先生に感謝する。

（7・7、ロンドン、テロの地獄と化す日）

活発なクラブ活動



同窓会教員相談役
総合科学科 大津 修郎

「さあ一大変だ!」「予算が・・・」ここ数年、九州

体育大会が終了するとよく聞かれる言葉である。毎年数多くの全国大会出場者を出しているからであり、嬉しい悲鳴である。

今年の全国大会出場をみると、団体の部、バドミントン、硬式野球、バスケットボール、ソフトテニス、剣道、卓球、ハンドボールの7競技〔団体の部13競技のうち〕、そして、水泳、陸上、柔道等の個人出場を含めると選手だけで88名、監督等を含めると100名以上の選手団である。ここ5年間の選手の全国大会出場者数は、平均で約80名出場しており常に上位にランクされている。主なクラブを見てみると、バドミントン部は、九州地区7連覇中、全国大会6連覇中であり、個人男子復も全国大会6連覇中の今のところ敵なしの状態である。また硬式野球部は九州地区6連覇中であり、ここ10年間で9回の全国大会出場、全国制覇2回、準優勝3回の活躍、その他バスケットボール部男子九州地区4連覇、剣道3連覇中、両クラブとも昨年度全国準優勝しており、今年は初制覇が期待できそうである。一方高専の中で、大きな大会であるロボット・コンテストにおいては、本校ロボコンチーム（あばうた〜ず）は全国大会出場4年連続、平成14年には全国優勝の快挙、今ではロボコンは北九州、九州地区の他高専から打倒北九州と言われ、最も注目されるまでになっている。

高校生の健全なる育成及びスポーツ・文化の振興に資せるものとして、全国規模の大会における活躍等をもとに集計、企画された高等学校スポーツ・文化データブック〔2004年度版〕によると、全国工業高等専門学校部門に本校北九州高専が堂々の第1位にランクされ、第2位神戸市立高専、第3位函館高専となっている。今では、本校は九州地区のトップだけではなく、全国高専のトップの位置にいとデータ的にも示されているところである。

7月の九州大会を本校で開催した時、ある高専の

外部コーチの方が、北九州の強さがわかったと話されたことを思い出す。グラウンドの整備、学生の挨拶、そして生き生きとした行動、態度に活力と活気を感じ、自分の学校も「こうでありたい、こうなるべきだ」と話していただいた。まだまだ足りない部分が多々あると思いつつも、心嬉しさを感じた言葉であった。クラブ活動の活性化は、学校の活力と大きく関わっていると言われている。今日も窓の外では、猛暑中、相変わらずグラウンドで、体育館で、挨拶、掛け声、そして軽快な足音が聞こえてくる。この声この姿が続く限り、北九州高専は更に発展し続けることと確信する。

挨拶



4代同窓会長・相談役

電気工学科1期 小出 和男

この度、創立40周年を迎えられるにあたり深い感慨が脳裏をよこぎります。

思い起こすと仮校舎時代とは比較出来ないほど素晴らしい施設の中、勉学はもとより、スポーツにロボコンにと在学生諸君も各人の能力を十分発揮できる環境になり、近年好成绩が続いていることは誠に喜ばしいことです。何故ならば、後輩諸君の活躍は、私共の直接のエネルギー源になっているからです。

ところで、40年という月日の流れの中、わたしをはじめ当初の同窓会事業は、自分の立場を死守す

るというか仕事へ取り組む情熱で精一杯で、そちらへの余裕がなかったのではと思います。その意識も薄く人集め、資金集め共に大変苦労が大きかったことは特筆するまでもない事実ではあります。幸いにも私は、4代目の会長ではありますが、25周年の記念事業を、学校として同窓会と共に成功させようとの気運が高まり、当時の植田校長以下、事務関係者の方々の協力もあり、会費の徴収もスムーズとなり、また、同窓会事務局の入江局長が母校の卒業生である強みが活かされて、今日活動の活性化が叶いました。これはひとえに皆さんの母校北九州高専に対する強い気持ちの現れであると認識しています。

さて、現在の私とは言いますと、35年勤めた西華産業を早期退社して、住み慣れた福岡の地を離れ、東京都品川区にある日本ダイヤバルブ（N. D. V）に勤務しています。東京での生活は、私も家内も全く初めてで、西も東もよく分からない状態でしたが、早々と、関東支部で、入江君の博士号取得祝いと、私たちの歓迎会を兼ねて、会津のペンションへ（6期井尻君経営）一泊旅行とゴルフコンペの歓迎会をしてもらい、しみじみと人の温もりを感じ大変感謝しています。同窓生諸君からも大江戸最新情報を教えられることも度々で感謝感謝の限りです。

これから営業で全国を回りますので、皆さんともお会いする機会もあるかと思います。その際は、母校の思い出話にでも花を咲かせようではありませんか。

この様に、関東支部は活動が大変活発ですので、関東に在住の方は次の機会には是非顔合わせ願います。合わせて他の支部も同様に盛り上げて頂き、あらゆる機会に会員相互の親睦を図るため、同窓生と集い、学生時代の若さを思い起こし、明日への仕事および家庭への活力へと活用願ひ、それぞれの分野で益々活躍され50周年を元気な姿で共に祝え

ることを希望し挨拶とさせていただきます。



昭和62年正月、国清先生退官祝賀会（右から小出氏、機械1期古賀氏）



総会で議長役の小出氏

同窓会と私



初代関東支部長
相談役・機械工学科1期 入沢 仁

40周年おめでとうございます。今年は戦後60年等、節目の年だとマスコミを賑わせていますが、私にとりまして、勤続35年、結婚30年と節目

の年でもあります。

振り返りまして、鉄条網に囲まれた旧造兵廠跡の仮校舎で行なわれた入学式からあつという間の40年でした。高専制度自体が未熟だった上に、わが校は急に開校が決まり4月24日が入学式の如く我々はもとより先生方、事務職の方、すべてが手探りの状態でした。

しかし、私の高専の原点はその2年間の仮校舎時代と、新校舎でのバレーボール漬けの3年間です。特に仮校舎での寮生活は、数十人が雨や雪の舞い込む大部屋に5～6人単位で生活していました。毎日が合宿のようで宿直教官、同年代の事務員の方々と、夏は寮の屋上で井筒屋、玉屋のネオンを眺めつつ、冬は食堂でストーブを囲み、マルタイラーメンを食べながら、今後の高専、自分たちの将来について、深夜まで語り明かしました。その仲間達と40年たった現在も新橋の居酒屋や、会津高原CCのグリーン上で「おい」「なんね」と話せる機会を持てるのも同窓会のお陰です。

25周年の総会で、学校創立時の懐かしい先生方、事務の方にお会いして、この楽しさを東京でも思ってたところ、故岩渕先生、入江司先生より学校本部でも応援するから、関東支部を立上げて欲しいと依頼（命令？）されました。その翌年の平成3年10月に銀座のピアホールにて、九州から多くの先生方、卒業生参加のもと第1回関東支部総会を開催することができました。その後、関西支部の設立に続き、転勤先であった名古屋にて東海支部の設立もお手伝いさせて頂きました。

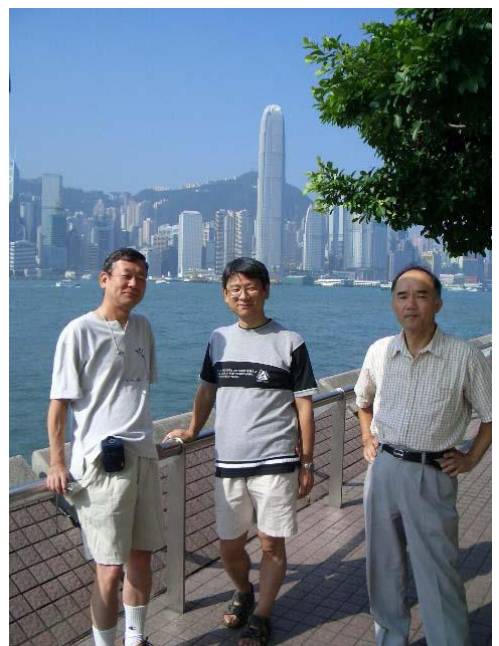
いつものことですが、同窓会に参加して感じることは、卒業生皆それぞれの勤務先（経営者もおられます）で色々な壁にぶつかりながらも、逃げずに精一杯努力されてることです。自分自身にとりまして、その姿に出会える同窓会は活力を得る栄養補給の場でもあります。酒を酌み交わしながら、懐かし

い話、仕事の苦労話、家族のめでたい話、女房の自慢（グチも）話、何でも有りの会話は「北九州高専同窓会は心のオアシス」そのものです。このオアシスが枯れず、末永く継続するよう、今後とも精一杯サポートさせていただく所存です。

おわりに、同窓会発展のため、常に応援して頂いている同窓会事務局の先生方、歴代同窓会長に厚く御礼申し上げます。



岩渕杯優勝（右から入沢氏、長野前同窓会長）



古江（前関東支部長・化学1期）氏を訪ねて香港へ

左から入沢、古江、中村氏

同窓会と私



同窓会相談役

機械工学科 2 期 榎村秀男

「雄志台（40 周年記念号）」の発行、心よりお喜び申し上げます。私は昭和 46 年 3 月の卒業で何かの縁があり、以来ずっと母校で後輩諸君とともに、また若いエネルギーをいただきながら歩んでいます。

全国各地に支部ができ、同窓会の活動を通して卒業生の皆さんの交流が深まっていることが大変嬉しくあり、と共に、お世話をされている役員の皆さんに敬意を致すところです。

私は同窓会が産声をあげた年から数年間、同窓会事務の仕事をしていただきました。仕事といっても元来、無精の私ですから、取り立てて何をやっていたといえるものではありません。今のように卒業生も多くありませんでしたから、教員室の書庫の中に収められたファイルですむ程度の書類でした。卒業式が近づくと同窓会から卒業生への記念品を用意し、学校が用意した受付の席で会費を徴収するのが、私にとっては毎年の恒例行事でした。今思えば、同窓生の皆さんには大変ご迷惑をおかけしていたものと痛感します。当時、私を最も悩ませていたものは、卒業生の名前を使って外部からかかってくる電話でした。学校の電話は音の違いで内線か、外線かが区別できるようになっていました。「リンリーン・リンリーン」は内線、「リーン・リーン」は外

線です。「リーン・リーン」の時は「あー、またか」という思いで受話器を幾度となくとった記憶が蘇ってきます。

同窓生の皆さんには学生時代のクラブでの活動は思い出多きものと思います。特に「高専大会」はそうではないでしょうか。今年の九州大会は母校で 4 種目が実施されました。なんと、地元開催の全種目で団体優勝という快挙を達成しました。クラブが盛んな学校はいろいろな面で学生が優秀で活躍するということを耳にします。後輩の活躍を応援したいものです。

母校の地元、志井も最近は大変マンションが立ち並び、モノレールの終点「企救丘」から門司豊前方面に延びる片側 2 車線の都市計画道路が開通しました。また、堀越の山を切り開いて、東九州自動車道のインターチェンジが完成しつつあります。昭和の時代に卒業された同窓生の皆さんには、志井の田園風景が懐かしく思い出されることでしょう。

同窓会のますますの発展と同窓生の皆様の活躍を祈念しつつ、近況報告にかえさせていただきます。



国清先生退官行事で司会をされる榎村先生

高専、ありがとう



5代同窓会長
化学工学科1期 長野 正美

私が高専に入学したのは、伝説の1期生が卒業した昭和45年。化学工学科の1期生として何がなんだか分からないまま入学してしまったというのが本音。

京都府犀川町から朝6時55分発のそれも蒸気機関車に揺られ、まだ眠い目をこすりながら城野駅まで乗り、それからバスで高専に通学したことを思い出しています。私はバスが苦手朝のラッシュと車酔いで学校に着いたときは、もうバテバテの状態でした。勉強どころの話ではありません（ちょっと言い訳じみたものがありますね）。

化学の1期ということ、当初は教官も非常勤講師がほとんどでした。クラスメイトも41人。当然のことながら人数は増えることはなく、一人減り、また一人と卒業時は36人になっていました。そのせいかクラスの絆は、非常に強かったのではないかと考えています。高専生は独特な絆で結ばれていると感じています。それは私だけでしょうか。

ものめずらしさからか高専の卒業生と聞いただけで何故か親しみを感じ、しかも北九州高専でないのにまた同じように感じてしまいます。大学ではそんなことは、まずないですね。そういう自分に高専でよかったと思っています。

そんな私ですが、5年生の就職活動では担任の金崎先生に大変ご迷惑をかけてしまいました。会社への就職を勧める先生に対し、こともあろうか地元の町役場に行くと言って困らせてしまったのです。本

心は企業に就職したい気持ちでいっぱいでした。やはり、田舎者だなと感じる発想でした。それは両親の体調が悪く、遠くへ出られないと感じたからでした。就職活動をするクラスメイトをよそに、私は公務員試験の準備。それでも金崎先生は企業への就職を勧めてくれました。「先生、本当に大丈夫ですから心配しないでください」と何度も言ったことを思い出します。先生、本当にご迷惑をおかけしました。

卒業当初は、公務員になった自分を悔やみ、また、そうさせた両親を恨めしく思ったものでした。でも今は、これが自分の人生なのかなと思っています。

また、長男が高専に進んでくれたことは、私の喜びでした。特に勧めたわけでもないのですが、最終的には高専を選びました。でも、私と同じ道は歩かせたくないと決めていました。就職先も自分で探してきました。そして横須賀に行ってしまいました。何か寂しい気持ちと自分のことは自分で決めたという嬉しい気持ちもあります。

先日、上京したとき長男を連れ、千葉市の金崎先生を訪ねました。80歳を超え、高齢で体調が心配でしたが、お元気な姿を拝見し本当に良かったです。長男を連れて行った理由のひとつは、私の就職のときにご迷惑をおかけした先生に是非とも長男を紹介したいとその一心でした。長男も私がいつも金崎先生の話をしていたのでごく自然についてくれました。同窓会に親子で出るのを楽しみにしています。「高専、ありがとう」



金崎先生の自宅にて